（ 続紙 １）

京都大学	博士（教育学）	氏名	門前　斐紀
論文題目	「表現愛」の人間学 ―木村素衛教育学における身体論の系譜		

（論文内容の要旨）

京都学派の哲学者木村素衛は、戦前・戦時下の教育思想界で、「表現愛」に代表される独自の思想で以て教育哲学を構築した人物である。本研究は、木村の身体論に焦点を当てることで、木村の哲学を「表現愛の人間学」として描きだし、その作業を通して、木村教育学の奥行きを文化と教育の創造的連関として捉え直し、今日の教育学的課題とりわけ表現や創造性をめぐる主題を再考することを目的としている。本研究は「表現愛の人間学」を論じる第Ⅰ部と、その人間学に基づく教育学的展開を論じる第Ⅱ部からなる。

第Ⅰ部第１章では、「表現愛」概念の提出以前に、身体論がどのような課題に向けて展開されたのか、その課題と展開とが確認された。思想の萌芽が「表現的制作人間の人間学」として把握され、そこから転機となった論文「一打の鑿」の芸術制作（ポイエシス）論と、論文「意志と行為」の道徳的社会的実践（プラクシス）論とがたどられる。前期思想を代表する両論文が詳細に検討され、芸術制作を掘り下げる美学的探究と、社会的道徳性を主題とする哲学探究が、身体論においていかに結合しているかが探られる。

第２章では、思想全体を通した身体論の枠組みを理解するために、前期思想から中期、後期へと論理展開を浮かびあがらせることが試みられる。焦点となるのは、前章に詳述するポイエシスとプラクシスとの連関についての理解である。両原理は後期教育学のなかで、「ポイエシス＝プラクシス」と術語化される。本章では「ポイエシス＝プラクシス」が「表現愛の人間学」の最初の視点として提示され、前期思想では別々に考察されていた両原理が、術語として示されるに至る論理背景が読み解かれる。

第３章では、第２の視点として「歴史的自然」の概念が論じられる。「歴史的自然」は京都学派に共有される用語であり、人間が対象的に把握する外界としての環境ではなく、人間と環境との相互交渉を契機として自己形成し、同時に両者の対話を可能にしながら変転する生命的次元を指している。本章では「歴史的自然」概念が身体論と接続される論理構造について検証される。

第４章では、「表現愛の人間学」を特徴づける第３の視点として、中期の美学論文に展開される「情趣」の概念が論じられる。「情趣」とは知や意志として働く「人間的主体」性を内に否定し切った、「人間性そのものの感情に於ける絶対的肯定」の作用のことである。木村は「表現愛」概念を基に教育学の体系を確立することをめざしており、この意味で「情趣的主体性」は、「表現愛」概念以後、木村が教育学者として美学的主題を改めて思索につなぎ留めた論点といえる。

第Ⅱ部第５章では、技術的身体論が木村の教育学の原理と方法論へどのように導入されたのかが明らかにされる。技術的身体論は、木村が「身体的存在」としての「人間的存在」のアクチュアルな在り方から教育に迫る視点としてとりわけ重視する論理である。また文化と教育の創造的連関のなかで育まれる身体の構造が把握される。

第６章では、木村教育学のなかで表現愛の論理が矮小化されたと批判されている「教育愛論」が再検討される。教育愛論については、「表現愛」と「教育愛」とが混同され歪曲された議論がなされていると指摘されてきた。本章では木村の限界点を読み返し、そこに身体論を接続することで木村の教育愛論にまた新たな展開を示す可能性があることが提示される。そのさい参照軸として三木清の哲学が読み解かれる。

第７章では、身体論が後期教育学にいかに継承され、どのような論点や課題を示すことになったかが探られる。特に「世界史的国家」論とのつながりで提起された「世界史的表現愛」概念と、その下で木村が学的な課題として探究した国民文化と国民教育との創造的連関が焦点とされる。後期教育学は国家主義に対抗する国民教育論の提示を課題としていたが、そのさい理論的射程が「国家」のレベルに絞られたため、木村の国民教育論は「表現愛の人間学」のもっていた創発的諸相を一面に封じてしまったことが明らかにされる。

終章では、「表現愛の人間学」に基づく身体論が、今日の学校教育の実践や学びの議論に対してどのような論点を提起し得るかについて検討される。本研究は最後に、芸術・表現活動と人間形成に関する今日的問いと可能性とを検証し、「表現愛の人間学」が象る「表現」「形成」「作ること」の意義について論じられる。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

木村素衛は主に戦前に活躍した京都学派の美学・教育学の代表的思想家であり、近年、再評価が高まっている。これまでの木村教育学の研究では、「表現的形成的自覚」という西田幾多郎の自覚論を基にした木村独自の自覚論を中心に捉えられことが多かった。それにたいして、本研究では先行研究を踏まえつつも、木村のテクストの詳細で綿密な読解に、木村の哲学と関係の深い西田幾多郎・田邊元・三木清らのテクストとの対照を加えながら、従来着目されてこなかった木村の身体論とりわけ「技術的身体性」の概念に注目し、従来の研究ではほとんど取りあげられることのなかった身体論とつながる概念の系を詳細にたどり結び合わせることで、木村の哲学を「表現愛の人間学」としてそのエッセンスを描きだし、さらにそこから文化と教育との創造的連関を明らかにすることで、木村教育学の新たな読解の可能性と今日的意義とを論証することに成功している。

「表現愛」とは、自他が同時相即的に作りかえられていく世界の構造化の原理であるが、身体論の系に関わる理論の道筋をテクストで丹念にたどることで、これまでは十分に理解されてはこなかった「表現愛の人間学」と生命論とのつながりが明確になった。すなわち、身体的存在が根ざしている普遍的地平というべき「歴史的自然」の概念、その地平において身体が働く行為一般の原理としての「ポイエシス＝プラクシス」の概念（芸術制作と道徳的社会的実践との連関を術語化したもの）、そしてその身体性の内奥において働いて知と意とを包越する純粋感情、美的動勢としての「情趣」の概念をたぐり寄せ、それらの概念の系から木村の「表現愛の人間学」を解釈する。この三つの概念を基にした新鮮な身体論の切り口で、「表現愛」の特性を浮かびあがらせ、どこまでも留まることなく刻一刻と自他が相即的に作りかえられていく身体性を中心とした木村の「表現愛の人間学」の独自性を明確に描いて見せたことは、本論文の一番のオリジナルなところであり高く評価できる。

木村の身体論を軸に再構成された「表現愛の人間学」を基に、木村教育学が「文化と教育との創造的連関」として解釈されることになる。従来の研究では、木村の国民教育論はいわゆる「京都学派の国家論」に基づくものとして批判的に論じられてきたが、木村において「ポイエシス＝プラクシス」の「＝」は、たんに相互依存的な矛盾的統一に留まらず、拮抗しつつ相乗的に多元性を深める動きとして捉えられており、この動的な身体論に基づく教育概念も、文化全体を編み直す文化としてどこまでも価値的多元性を実現する動きとして捉えられていたことを明らかにする。「表現愛」も、「歴史的自然」に根ざした身体による文化を根底から育む世界の構造化の作用にほかならず、この「表現愛の人間学」の立場においては、国家も絶対的で普遍的なものではなく相対的な文化所産の一つと見なされ、教育は国家も含めて文化を生みだす文化として動的に捉えられる。著者は木村教育学の不十分性・限界性を指摘しつつ、木村が自民族中心的な国家主義に対抗する国民教育論の構築を課題としていたことを明らかにする。「表現愛の人間学」の立場から木村によるこの課題への応答を捉え直すことで、これまでの木村教育学の解釈ならびに評価に再考を促す優れたものといえる。

さらにこの木村の「表現愛の人間学」の研究は、たんに木村教育学の新たな解釈を切り拓いただけでなく、京都学派の身体論研究としても十分に評価に値するものであり、さらに「表現愛の人間学」が象る「表現」「形成」の概念と緊密に関係している美術教育やコミュニケーション教育の理論研究としての可能性を具体的に提示した点においても、高く評価できるものである。

以上述べたように、先行研究を綿密に検討しその問題点を指摘し、自ら独自の解釈を打ち立て今日での木村教育学の可能性を明らかにした本研究は、木村素衛の哲学ならびに教育学の研究として高く評価することができる。試問において、アガペとエロ

ス、普遍性と個別性の理論理解などが課題として指摘されたが、これらの課題の指摘は、本論文の主題のさらなる発展に向けての指摘であり、本論文の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２９年６月１５日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降